

コラム：サッカー家の父娘（特集 イエメン -- 忘れ去られた「アラブの春」の落とし子）

著者	佐藤 寛
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア 経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アジ研ワールド・トレンド
巻	248
ページ	38-38
発行年	2016-05
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://doi.org/10.20561/00039571

サッカー家の父娘

佐藤 寛

二〇一六年三月現在、旧南イエメンの首都アデンは一応イエメンの正統政権とみなされているハーディー大統領派のコントロール下にあるとされているが、ホーシー派が閣僚の滞在するホテルに対する砲撃を行って以降は、大半の閣僚は、サウジアラビアに本拠地を移している。

他方、政府職員の大半は引き続きホーシー派支配下のサナアの省庁で働いている（ことになっている）ものの、リヤドにいる大臣からの指示を受けているわけではない。リヤドにいる閣僚には、サウジアラビア政府の提供でそれなりの事務スペースはあてがわれているようだが、もちろん十分なスタッフが整っているわけではない。

そんな流浪中の大臣の一人にナーディア・サッカー情報相がいる。同国の有力英字紙『イエメンタイムズ』の編集責任者を務め、「国民対話」にも参加するなど民主化勢力のスポークス・ウーマンとして活躍してきた。二〇一四年の内閣改造で当時の国連特使ベノマール氏の推薦もあって情報大臣に抜擢され、二〇一六年一月にホーシー派に軟禁されているハーディー大統領の辞意を内外に発表したのも彼女である。

そのサッカー大臣が二〇一五年八月日本政府主催の「女性会議WOW」に参加のために来日した。同大臣は初来日だが、実は彼女の父親

であり『イエメンタイムズ』の創始者であるアブドルアジズ・サッカー博士は一九八八年にアジア経済研究所の客員研究員として三カ月間日本に暮らしたことがある。

経済学専攻の同博士は、イエメンの協同組合運動の研究などで有名である。正義感の強い「国士」と呼ぶにふさわしい人柄で、南北統一直後の一九九一年にイエメンで初の英字紙を刊行して世論の喚起に努め、また自分の故郷であるタイズ郊外の農村地域の社会開発、女性の手工芸支援のために日本大使館の「草の根無償協力」の支援を受けてローカルNGOを運営するなど、実践家としても活躍していた。

一九九七年から九九九年にかけて筆者がサナアに駐在していた際、時折事務所を訪れると彼は国を憂うる心情を吐露してくれたものである。サレハ大統領にとつては汚職批判など「目障り」な存在だったに違いなく、懐柔目的もあって何度か入閣の誘いもあったようだが、サッカー博士は在野での政権批判を続けた。しかし、一九九九年の夏、サナア市内の目抜き通りで車にはねられて命を落とした（暗殺説もあるが真相は闇のなかである）。享年四八歳であった。

同博士には二男二女があり、長女が当時高校生であったナーディアで彼女は兄ワリードとともに『イエメンタイムズ』を引き継いだ。

国内の民主化運動や欧米大使館など外国人コミュニティから応援され、『イエメンタイムズ』は二〇一五年まで週二回の発行を続けていた。しかしながら、サウジアラビアの空爆や国内流通網の混乱のあおりで新聞用紙の確保も困難になり二〇一五年六月以降はウエブでのツイッタ的な記事発信のみとなっている。

ナーディア大臣によれば現在の情報省の仕事は、ホーシー派に乗っ取られた国営放送、国営新聞、ウエブサイトに対抗する放送、ウエブ発信をリヤドから行うことだという（二〇一五年八月当時）。

また、来日時に秋葉原を案内したときに彼女が目にしたのは「手回しハンドル付きラジオ」であった。日本では震災用に売られているものだが、空爆によって電気水道などのライフラインが破壊されているイエメンにあって、情報を人々に伝えることは何よりも大切である。「こうしたラジオを特に地方部に配布して、真実を伝えたい」という彼女の言葉が印象的であった。別れ際に筆者が、日本でサッカー博士の執筆した論文のコピーを手渡すと、父親思いのナーディア大臣は瞳に涙を浮かべて喜んでくれた。その論文のテーマは「明治維新期の国家政策とそのイエメンへの適用可能性」である。いつの日かその論文が、娘の手を経てイエメンの再建に役立つ日が来ることを願ってやまない。

（さとう かん／アジア経済研究所 新領域研究センター 席主任調査研究員）